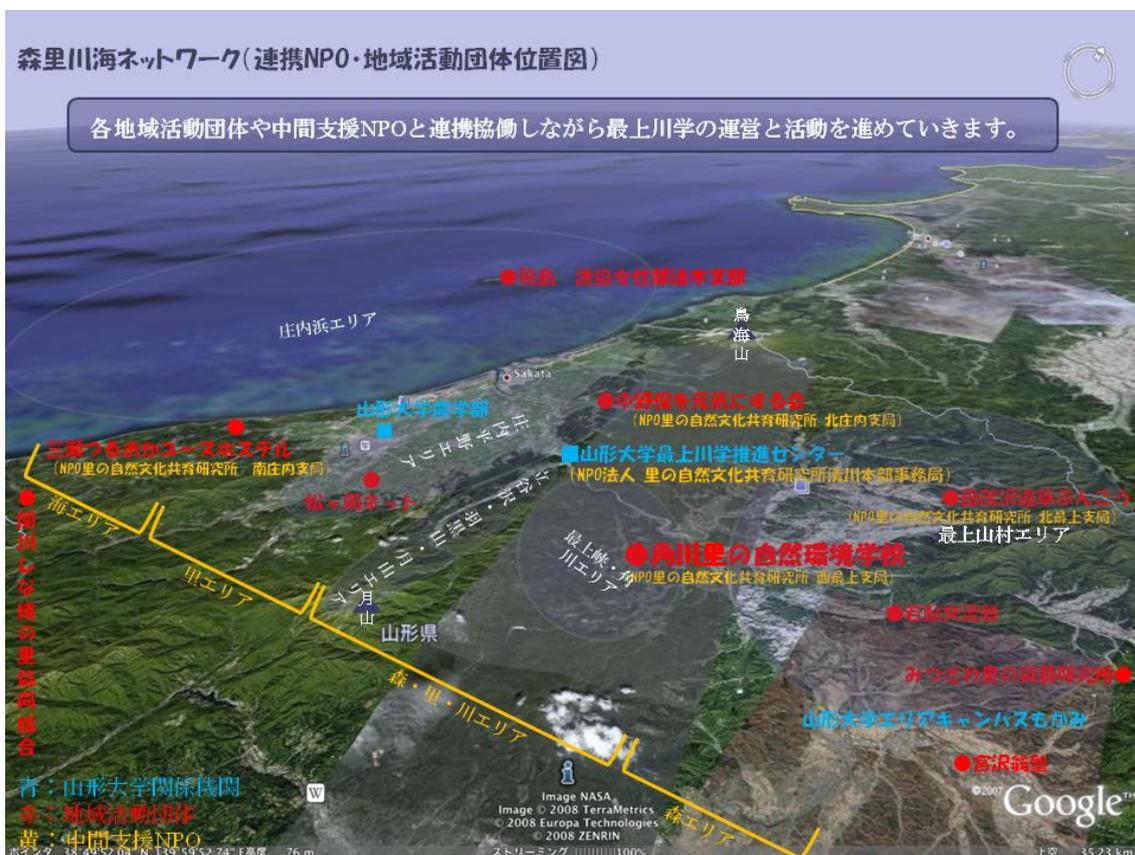


みちのく最上峡！森・里・川・海・都市をつなぐ郷土検定育成プラン ワークショップ活動実施の記録

平成 22 年 3 月 作成：NPO 法人里の自然文化共育研究所

21 年度は、山形県北部の地域を主要拠点として活動を実施。北村山地方・最上地方・庄内地方の各地域集落を結んで行われていた。集落と関連協力団体は次の通り。

- 村山地方 ・尾花沢市中島・行沢（宮沢翁塾）
- 最上地方 ・最上町満沢（みつざわ里の資源研究所）
 - ・金山町田茂沢（田茂沢道草ぶんこう）
 - ・舟形町長沢（若鮎交流塾）
 - ・戸沢村角川（角川里の自然環境学校）
- 庄内地方 ・庄内町清川（立谷沢川流域振興プロジェクト協議会）
 - ・鶴岡市三瀬（つるおかユースホテル）
 - ・鶴岡市関川（関川しな織共同組合）
 - ・鶴岡市松ヶ岡（松ヶ岡ネット）
 - ・酒田市松山土渕（プロジェクト外山）
 - ・酒田市中野俣（中野俣を元気にする会）
 - ・酒田市飛島（飛島漁協女性部法木支部）



(1) 最上町満沢地元学活動報告

取り組みの経緯と活動の成果

最上町満沢地区では、これまで首都圏との子ども交流事業を地区と町の協働の中で続けてきた。地元学には2008年よりNPO法人里の自然文化共育研究所と共に本格的に取り組み始めており、今回はその実践という位置付けで活動を行った。

一方、最上町は古くから馬産地で知られていたところでもある。また、集落作りの活動と共に馬を軸にした取り組みをしていきたいという地元活動者の意向もあった。そこで集落の地域調査後、集落より馬で最寄りの観光地赤倉温泉に行くという学生や当NPOスタッフをモニターにしたツアーの実験プログラムも併せて開催した。また取り組みには大学コンソーシアムやまがたの最上川学試行プログラムの位置付けで、山形大学と公益文科大学の学生ら10名ほどが参加している。

活動プログラムは次の通り

1日目

- 10:33 JR 最上駅集合・移動
- 11:00 満沢公民館着・オリエンテーション
- 13:00 実践地元学（現地の方と集落調査）
- 16:00 満沢公民館にて調査結果のとりまとめと発表
- 18:30 情報交換会など
- 20:00 ホームステイ先で追加の農家調査を行う。

2日目

- 8:30 満沢集合
 - ・馬のための散策道踏査と馬の試乗
 - ・馬で赤倉温泉へ
- 昼頃 温泉入浴と昼食 昼食後、馬で満沢へ
- 14:00 満沢公民館にて振り返りワークショップ
- 15:00 終了・解散



調査の様子



集落公民館で調査結果のまとめ



馬で集落と赤倉温泉をハイキングする

← →



今後の方向性

取り組みを終えて参加者の感想は次のようなものがあつた。

- ・ 地元学をしてみて、改めて地域の足元を見れた。
- ・ よその人からみつめてもらったのが大きな力になったのではないか。
- ・ こういう時間を作っていないと駄目なんではないだろうか。一日一日に流されるというか簡単に過ぎていってしまうので、自分たちで地域を見つめていくような時間が必要。
- ・ 子供から大人まで一緒に地元学をしてみて、子供の感性が違ふとか、大学生の感性、ヨソモンの感性など、さまざま感性で地域を見ることが出来た。
- ・ 地域の人がどうするか、どうしたいかが原点でヨソモンはあくまでもお手伝いである。地元実践者からは今後に向けて次のような感想を頂いた。

- ・ 地元学を何回か続け、資料の整理をして本当の宝を整理する。
- ・ 資料をもとにもう一度集まって復習し、宝に磨きをかけていくのがステップ1ではないだろうか。
- ・ 宝をどのように有効活用していくかを話し合い、実践すること。
- ・ 手法については専門家、NPO やいろんな人から知恵をいただいたり、学生にこういうものをこうした方がいいのではと、アドバイスをいただいたり、よその人から資源を活かす策、活性化する為の皆で協議していただく。

22 年度以降、今回の実験プログラムを生かした活動計画を作成するため、調査をさらに精緻化していく必要があると思われる。特に地元のみつぎわりの資源文化研究所を中心にしながら、地域の知的財産や技術の蓄積を図り、他地域と連携した広域的ツーリズムや商品の販売にも並行して展開していくことが考えられる。

(2) 金山町田茂沢地元学活動報告

取り組みの経緯と活動の成果

金山町田茂沢は、閉校になった分校を利用した住民の創作活動や地域活動が盛んな地区である。地区は、田茂沢、入田茂沢、蒲沢と 3 つの集落に分かれており、それぞれの集落が独自性を持ちながらも一体となって地域運営学校「田茂沢道草ぶんこう」を形成し活動を展開している。2007 年より地元有志のメンバーで地域資源を再発見する地元学活動に取り組み始め、2009 年からは地区住民ぐるみで「郷土学」と称して地域調べを行ってきた。また、外部参加者等のホームステイ活動も 2008 年度からスタートしている。

こうした活動の中で、田茂沢の様々な資源（自然、文化、人材）が掘り起こされつつある。本事業では、これまでの田茂沢の地域調査の成果を取りまとめていくとともに、里山資源や食文化など他の地区と連携しながらより一層伸ばしていくための追加調査や食や学生受け入れ等の実験プログラム、および発信活動のためのインターネット整備を 8 月～2 月にかけて長期にわたって行った。

2 月には下記の追加調査と取りまとめ活動、学生たちをモニターにしたホームステイ活動や地域見学ツアー、インターネットによる発信活動を総合的に行った。

・日程

1 日目

- 11:00 金山町到着 オリエンテーション
- 12:00 昼食
- 13:00 炭焼き見学、集落内踏査
- 17:00 情報交換会
- 終了後 農家ホームステイ

2 日目

- 9:00 調査データの取りまとめ I
- 12:00 昼食
- 13:00 調査データの取りまとめ II
- 15:30 終了



伝統の炭焼きの見学



これまでの活動を振り返り
意見交換会を行った。→

今後の方向性

田茂沢道草ぶんこうでは、今回の他地域との連携活動も踏まえながら、子どもたちに地域の自然や文化を教え伝えるための独自の郷土学検定制度を創設することを22年度に計画している。また、ふるさと学習活動を通じた各種の教育旅行や大学生等を対象とするゼミ合宿の受け入れなどを計画しており、今後の体験学習型ツーリズムへの展開を図っている。

また、これまで積み上げてきた創作活動（工芸品等）を基にした産品開発や、食のお母さん方の組織化が今回の活動を契機にして進んでいるため、これらを組み合わせた生産活動を計画している。

他の地区との協働という点では、飛島への炭の供給について、戸沢村角川地区と共に、22年度から実施することになる。飛島から輸入される海産物は、食のお母さんが他のチームに導入され、新たな料理開発やイベントへの利用が期待されている。

本年度インターネットによる本格的な情報発信が地区住民の手で直接行われるようになった。URLは次の通り <http://blog.canpan.info/michikusa/>

当プロジェクトでも関連のホームページにリンクを張り広報するとともに、インターネットを介したテレビ電話システムを開通させ遠隔地との打ち合わせや相談なども実施できる体制を確立させた。これらを使って、事業化を前提にしたモデルプログラムを22年度継続的に取り組む予定である。

(3)舟形町長沢地元学活動報告

取り組みの経緯と活動の成果

舟形町では以前より仙台からの中学生を対象とした体験学習の受け入れや、首都圏の子ども会関係の体験活動の受け入れを、町が主導して行ってきた。2007年より地元住民の独自の活動展開が盛んになり始め、2008年には大阪の高等学校の修学旅行受け入れなどが集落住民の自主的な活動として行われた。また、こうした受け入れ活動と前後して、地域を見直す取り組みもスタートしていた。

今回の取り組みでは、こうした集落の自主的な住民活動をさらに検定を活用した学習プログラムへと充実させるためこれまでの調査活動を取りまとめることを主眼に置いた活動を行った。特に、住民と外部者の間でこれまで行ってきたワークショップや調査データが紙ベースでそのままの形で保管されていたため、それらを電子データ化した。

ただし、データには漁法や食文化を中心にまだまだ不備な点が多いため、今後継続した地域調査を住民とともに行う必要があると考えられる。

今回の活動の波及効果として、地域独自の団体として若鮎交流塾が誕生している。このような住民主導の継続的な活動が進んだことは大きな成果の一つだった。また、川漁とそれに結びついた食文化が特徴として顕著である。検定活動の位置づけだけではなく、検定後にはこれら川資源を生かした食産品開発へとつながっていくことが他の地域との連携の中で考えられる。



現地調査の様子



調査結果の発表



アユの築場の見学

(4) 戸沢村角川地元学活動報告

取り組みの経緯

戸沢村角川地区では、地域の子供たちへの環境教育活動を行っていた市民団体「南部里地探検隊」を前身に2003年8月、組織体制を整え「角川里の自然環境学校」が設立された。農山村の自然や文化を次世代へ伝えるとともに、本当に豊かに生きるための智慧や技術を教えつつ、子供たちと一緒に新しい「ふるさと」づくりを進めている。山、川、食、農、ものづくり、民話など多彩なプログラムを実施しており、里の住民による地域運営学校として、教育委員会などのサポートを受けながら行政と一体となって、継続的な自然体験学習活動を展開している。「実際に生活し子供たちと共に活動する里地里山博物館」（守山弘 東京農業大学客員教授）など内外から高い評価を受けている。

2004年「里地里山活動30」（読売新聞主催・環境省共催）選定、2005年「田園自然再生コンクール」（農林水産省・環境省主催）入賞、同年「エコキッズやまがた大賞」（山形県環境アセスメント協会）受賞。2006年6月山形県環境学習支援団体認定。2007年2月食育活動東北農政局長賞受賞、4月「みどりの日」環境活動功労者環境大臣表彰。また「森、里、川、海とつなぐ自然再生」（中央法規出版2005年）に全国の自然再生13事例の1つとして取り上げられている。

07年4月研究教育調査部門を独立。更なる活動の幅広い展開を目指して里の自然文化共育研究所として同年12月NPO法人に認証された。これが当法人の設立の経緯とも重なるものである。

活動の成果

戸沢村角川地区では、すでに活動体制が定まっており、自立的に様々な活動が展開している。今回は、これまで調べられてきた地域調査データの追加分を取りまとめるとともに、後節で触れる産品開発や外部交流、モニターツアーなどに力を入れて取り組んだ。地域調査データは今回の取りまとめでは対応する写真を十分に取得することができなかったため、今後の継続的な調査や資料収集が必要と考えられる。

また、外部者向けのプログラムについては、角川地区では一つのプログラムにかなり多くの要素（山、川、農業、食など）が含まれている。それらの要素分析を行って、提供していかないと外部者からは分かりづらいとの指摘もある。そのため、外部者と共に作成した調査データを活用しながら、よその視点も導入して地域の良さやおもしろさを外部に発信できる表現やイメージ作りが今後の課題となると考えられる。

いずれにしろ今回の調査と実験活動を積み上げて、他地域との連携を通じながら地域の独自の体験型検定の在り方を模索したいと考えている。

(5) 尾花沢市中島・行沢地元学活動報告

取り組みの経緯と成果

尾花沢市では2009年度より宮沢地区（中島・行沢集落含む）を中心とした山間地域における地域再発見と地域づくりの活動を展開している。また、地元宮沢翁塾が、これまで独自の酒造りや雪室を利用した産品開発などに取り組んできた。

当事業では、こうした活動に外部者の目線の違いを導入しながら改めて地域集落単位で地元を見つめ直してみたときにどのような発見があるかを実証的に示すプログラムを行った。調査の結果、これまでは地元で十分に気がつかなかった要素（水が豊富なこと等）が再発見され、日常の暮らしを生かした学習や検定プログラムメニューの開発が見込まれる。本年度は十分な時間的余裕が取れなかったため来年度にかけてモデルプログラムを積み上げながらさらに追加調査をしていきたい。また、里の自然文化共育研究所にとっては、初めての本格的な村山地域での活動でもあることから、山形市・仙台市など大都市圏とのルート開発の途中に位置することも勘案して広域的な検定プログラムの作成にも取り組んでいきたいと考えている。

今回の調査は11月に行われているが、冬ごもり前の集落ということで、冬季を過ごす前の準備や保存料理などこの地ならではの生活文化を調査することができた。集落の参加者は100名にもおよびこの地域のまとまりの良さや活動への関心の高さがうかがえる。外部からは戸沢村角川の高校生や若手メンバーが4名参加し、地域間の違いなどを若者なりの視点から提供した。その他に山形大学の学生が5名参加している。

・日程

14:30 尾花沢市基幹集落センター着 事前下見調査

18:00 情報交換会

11月29日（日）

8:30 中島地区着

地元学現地調査

12:00 昼食

13:00 追加調査及びマップ、
資源カードまとめ

15:00 発表会

16:00 終了



地図を広げて調査地を地元住民と検討する

(7) 鶴岡市三瀬地元学活動報告

取り組みの経緯と成果

鶴岡市三瀬地区では、2005年以降戸沢村角川地区との子ども交流を通じた体験学習や地域調査活動を行ってきた。本事業では、これまでの活動データの整理取りまとめをするとともに、今後の活動展開のためのワークショップを行った。2009年11月と2010年3月に山形大学を中心とする学生と当NPOスタッフメンバーがつるおかユースホステルで会合を開き、活動展開を模索した。合わせて周辺の踏査と地元学データの整理と電子データ化を図った。

三瀬地区は山間地から海岸までコンパクトにまとまって地区内に深まれていることから、森里川海連携活動のモデルプログラムができる。また、山形県が進める新潟県村上地域との連携プログラムにおいても地政学的に中心を占めるため、今後の拠点として計画されている。



三瀬地区内の森林調査



木の実や植生を調べる



これまでの調査内容をチェックし、
まとめる（於・つるおかユースホステル）



これまでの調査内容をチェックし、
まとめる（於・つるおかユースホステル）

(8) 鶴岡市関川地元学活動報告 森を織る文化～関川のしな織り～

趣旨

地域に根差した工芸品づくりと地域づくりについての調査を行い、今後の連携や産品に関する検定メニューの創設に向けた可能性を探るため、調査研修活動を行った。

山形大学農学部における研修（山形大学農学部 助教 神田リエ氏のお話から）

・しな織について

森林文化論 民話の中に森林が登場。森林試験を資料として文化の研究を行ってきた。現地の空気にふれながら学んでいきたい。しな織は、菩提樹の木をはいで織るもので、2工程ある。

しな織りにはシナノキ ・オオバボダイジュ ・ノジリボダイジュの樹皮から繊維をとりだし糸として織りあげたもの。三大古代織りとしてしな布・くず布・芭蕉布がある。樹皮セイヒ シナ・フジ・コウゾなどシナが育つ風土 雪に強い山地でも低いところに自生 六月の中月から下旬に梅雨を多く含んでいるので表皮を剥ぐ。

・継承された背景

豪雪地帯であること

森林資源に依存した暮らし

高齢者や女性の仕事（冬）

一年を通した農作業の合間にしな織りの作業日が組み込まれていること。

日常の暮らしに根付いたこと・女性たちのユイ

・関川におけるしな織りの記録

分献より（一部）諸品買物当座控帳・・・18

50年1855年に酒造用のしな布（科袋）購入の記録

弘采禄・・・志なと云う布の事と題しての記録（志なという布は袋や畳の縁などに用いられている）

年中受払簿・・・しなを畳の縁り用に購入の記録があり

・課題 原材料の確保 後継者問題などがある。



しな織の体験

関川しな織センターにて（センター長 五十嵐勇喜氏のお話から）

・しな織について

古代の織り物、1200年前古い本にしなふという言葉が出てくる。

↓しな布についての初出は関川では不明

長野は国名が「信濃の国」というようにしな織りが盛んだった。自分でできるものは自

分で織って着る。自分で作らないといけない、織るより編んだかもしれない。シナノキの皮を使う 古代織りとは木の皮を使ったものが代表的である。45戸（43戸）村中で織り物をしている。

シナノキ 関川では植えておりますそして植えたものを使っている。

シナノキは全国にあるし世界にもあるがこちらの木とは少し違うようである。

シナノキ・・枝打ちをし、枝がないように育てる 15年～20年が良い。若い木の方が良い。皮を剥ぐには最高のものである。

・しな織と地域づくり

この辺は豪雪地帯なので、冬の厳しさがしな織りを残してくれた（冬の里人の手仕事として手着したと言える）。そして昔は商人が買い上げていたので良く売れた。

昭和50年代 しな織りが売れない時期があった、その頃は化成系の発達でナイロン系の糸が主流になり手作りが全く売れなくなった時期があるということ。そうした厳しい時期が10年位続いた。しかししな織りを使った民芸品を作った人がいたため息を吹きかえした。すべての織り物が復活し古代ブームがおきた。今では着物の帯締の紐などにも使われている。

しな織りセンターを建てたことは良かった。ここは公民館が古くなったのでそのたてものを維持するためにセンターとして復活させる目的もあり、かなり反対的な意見もあったのだが、村おこしの為でもあり助成金を出してもらって建てるのはしな織りで活性化させようとの考えもあった。

・しな織による地域づくりの展開と今後の課題

しな織りセンターを建て1000人のお客様が来場があった。対応できないほどの人数となった。平成元年には組合（法人化）を発足して商売を始めることになった。観光客は3000人～6000人にまで増加した。

通常業務で商品を展示する場所として平成17年にぬくもり館を建てた。平成元年には関川協働組合が立ち上がり、「しな織りまつり」をすることになった。こちらは20年続いている。二日間で3000人集まるほどのものとなっている。こうしたまつりが村をまとめているような気がする。祭りがあるから関川が生き生きしているということも言えると考えている。しかし最近では地元の産物が減っている。猿の被害などもありや山に人が行かなくなったことでさるが畑にくるようになった。それと高齢化なども問題の一つである。今後しな織だけではなく、各家で薪ストーブを使っていることから、灰があるのでこれを活用した新たな事業展開を模索しているところである。

(9) 鶴岡市松ヶ岡地元学活動報告

取り組みの経緯と成果

松ヶ岡では2008年より地元有志メンバーと共に地元学の活動に取り組んでいる。これまで、戸沢村角川地区の子どもたちやふるさと緑の協力隊員の参加を得ながら地域のあるもの探しを行ってきた。また、庄内映画村や松ヶ岡開墾場の史跡として観光地を有している当集落では、これら調査の成果を活用した地域観光プログラム作りを模索している。農業に付け加えて、新たな事業展開を図ろうとしているわけである。

2009年度事業では、これまでの活動成果を取りまとめるとともに、大学生のホームステイの受け入れの実験プログラムを実施し幅広い層の世代がかかわれる学習プログラムの創設を目指した。現在のところ集落ぐるみの成果報告と意見交換会を行っており、22年度以降、有志のみならず松ヶ岡集落が一体となって、かかわっていく方向性を打ち出している。

2009年度活動実績

- ・9月～12月 これまでの地元学データの電子化
- ・1月10日～11日 地元学による追加の地域調査とホームステイ受け入れの試行
- ・3月21日 集落での全体報告とワークショップ

地元住民の感想より

- ・自分が住んでれば当たり前の松ヶ岡ですが、いろいろ調べれば深いものがあった再発見した。今思えば自分の親から松ヶ岡がこんな事だということを知っておけばよかったかなと悔やまれる事です。また今度新しい発見ができればいいなと思いました。よろしくお願いします。
- ・どういう趣旨でやるという事がわからないが参加させてもらいましたが、私は学校を卒業してすぐに農業をし松ヶ岡農場を今もやっているのですが、農業がいろんな面で厳しい、みんなの家が農家でしたが米、柿などいろんな物が採算が取れない状態でほとんどの家が他に勤めてそちらの給料をベースにして生活しているという風な状態で農業専門でやっているという家がほとんどいない。畑、田んぼ、今は果樹園になっている所をどういう風に維持をしていけるのか、あるいはこの生活していくうえでプラスになって皆がそれでやっていけるようになるのかが私が一番心配なところです。そういうところで何らかのアドバイスをいただければと思います。
- ・私はここに生まれ育って約70年になりますが、参加させてもらって新しい、わからない事が認識させてもらいました。こういう事をやってもらって我が家の経営、あるいは部落の活動にどのように活かしていけるか期待します。
- ・みなさんどうもありがとうございました。私も参加させてもらって皆さんが言っている通り再発見、自分がなかなか村の事、昔の事を考えたりしても時間的余裕もなかなか無

くて、いい機会を与えてもらいました。逆にまだ若いつもりでいてもいろいろ見ていくとほとんどあれそうだったけな、こうだったけなあと思い出したり、やったことあるっけなあと自分も随分年をとったんだなあと実感が出てきました。それで今いろいろと松ヶ岡の活性化ということでやらなければいけない事とか取り組んでいる事などありますが、その中の大きな事業として位置づけさせてもらって、松ヶ岡が活性化させてもらうためにもこの事業の行く先、展開を期待したいし、出来ることは我々もやっていきたい。今後ともよろしくお願いします。

- ・ 私は主婦業2年目で伝統食に今回挑戦させてもらいましたが、いろいろ聞いてみると本家、分家、それから厳しい姑さんについてお嫁さんでいろいろ微妙に違うことがわかりました。もう少し調査するのであれば、食文化一つとってみてもまだおいでなさない方もいるわけですので埋もれているものがあるのではないのかなあと私は思いました。だから記入、アンケート見たいなものを配ったりすればまだまだ知らないでいる事、それから金子さんがおっしゃっていた、お年寄りがいる間に聞いておくというのが大切だと思いますので、先輩方がいっぱいいるわけですので今のうちに若い人たちに、家庭で伝わっていくというのが難しい部分があると思います。今日の感想では昔の少年が杉鉄砲を生き活きと作っている様子を見て家の孫にも是非教えてもらって、じじだまし、ばばだましを掘りおこしたいと思いました。
- ・ この松ヶ岡は去年か一昨年に山形県の景観賞というものをいただきました。ここに景観というジャンルが無いというので次回、そういうところをできればなあと思います。桜の花の時期や桃の花、あるいは水芭蕉など観光資源は結構あると思うのでそっちのほうをもう少し見ていただきたいなあと思います。夏と冬だけしか地元学をしていないので春と秋をお願いしたい。松ヶ岡の売りは景観だと思う。
- ・ 私たちも参加させてもらいどうもありがとうございます。この中では一番最年長だと思います。おいでになった皆さんの熱心さに驚いています。それでこれから松ヶ岡がますます発展することをお願いしておきます。年長者として。
- ・ いろいろな事感激しました。
- ・ 2日間でよくもこんなにいっぱい調べたととても関心しています。まとめかたも上手でびっくりしました。こんな時間でこんなできて今の若い人は凄いなと思いました。私が出た先が短いですが、これからの松ヶ岡の発展のために、これからもいろいろとご協力していただければありがたいと思います。どうもありがとうございました。

今後の方向性

今後の展開として、地元住民をガイド役に想定した集落案内マップやパンフレット作り、松ヶ岡の各種施設の史跡保全と一体となった体験プログラム作りが考えられている。当事業の研究データをこれらソフトプログラム作りに運用した資料作りから22年度は活動を始める予定である。

(10) 酒田市松山土渕地元学活動報告

取り組みの経緯と成果

酒田市松山土渕集落は、集落背面に眺海の森という県営の観光地を持っており、当 NPO 活動メンバーがその森を拠点に様々な里地里山活動を展開してきた。これまで集落がかかわった形でのツーリズムやイベントについては、十分に行えてきていなかった。本事業では、従来の里山活動や森林ボランティア活動と合わせて、集落とその周辺の自然や文化を学ぶプログラムを模索するためのワークショップを行った。また、当活動を契機に住民と外部者による地域活動団体「プロジェクト外山（とやま）」が発足し、活動の継続性を確保するための組織化も図られた。

- ・ 11 月 地域調査の実施
- ・ 12 月～1 月 調査データの取りまとめ
- ・ 2 月 調査結果の報告と 22 年度以降の構想作り

以上を土渕集落と外部参加者計 40 名の参加の中で行った。

今後は、集落周辺の既存の観光施設やハード施設と合わせながら、集落周辺の里地環境保全や、子どもたちへのふるさと体験、学生たちのボランティア活動の場などを想定し、各種のソフトプログラムを立ち上げることを考えている。

同時に、集落内でキウイや柿、柚子など様々な果樹を育てているためこうした産物とツーリズムをパッケージ化したプログラムや、新たな製品の開発を他の地域と連携しながら作り上げていくことを検討している。

22 年度、大学コンソーシアムやまがたで取り組んでいる最上川学の授業プログラムの中に位置づけられているため、そうしたプログラムの中で試行実践を積み上げていく予定である。



現地調査の様子（植生調査）



集落での結果報告と意見交換

(11) 酒田市中野俣地元学活動報告

取り組みの経緯と成果

酒田市中野俣では2006年よりふるさとづくりの活動が活性化している。これは広域合併により旧平田町が酒田市に統合するのを機に、もう一度地域集落を見つめ直し地域づくりをスタートさせていきたいという意思が強く働いたことと起因している。

すでに中野俣地区では、2007年地元学による調査の活動を基に『中野俣百科事典』が地元住民の手で作られ、そこに載せられた地域資源を生かして活動を展開していこうと2008年には「中野俣を元気にする会」が発足している。以来、戸沢村角川地区や鶴岡市三瀬のつるおかユースホステルを招いた講演やワークショップ活動を積み上げてきている。

当事業では、これまでの活動をさらに広域的に展開し、ツーリズムにも直接結びつくようなホームステイ活動などを見据えた地域調査活動を展開した。また新たな食文化の産品化も図ろうとしている。

また、これまで低調であった老人サロンを再生させ、当NPO里の自然文化共育研究所のかかわりの元、旧中野俣公民館（現清流会館）を拠点に調査と老人たちの地域づくり活動（工芸品づくりや民話伝承活動など）を支援する活動をスタートしている。

●地元からの感想

- ・ヨソモンの目の付け方がやはり違うな。
- ・毎日見ているので気がつかないが、ヨソの視点を入れて勉強するのがよいと思った。
- ・常日頃見ているのが何かをきちんと把握していないものもけっこうあることに気づいた。例えば、何という木かなど。

- ・2時間ほどだったが年齢を感じることはあった。
- ・地元の土地所有者をよく認識していないのでこれをキチンと考える。
- ・日中家にいない。空家も目立ってきているのをどうするか考えていく必要あり。
- ・ヨソからの刺激も重要。

「自分の家を見せて、自分では感動を感じなかったが、ヨソモンが見て驚いてくれたのをうれしく思った」

「自分たちで見れば価値のないものを真剣に聞いてくれて、驚いてくれて、やっぱり大事にしていくことが必要。残していくこと。次代、孫に伝えて守ることを教えていきたいと思った。

- ・次代の方々に教える時間がない。
- ・昔の守りたいものが、今の年次様式(?)にあっていないがために捨てられたりすることもある。Ex.昔のタンスが見捨てられることも。
- ・五得など。
- ・場があれば残ることもある。生きてきたことも伝えていきたい。場を作ることが重要。

(12) 酒田市飛島地元学活動報告

取り組みの経緯と成果

飛島と戸沢村角川地区は2006年より地元学活動等を通じて交流を深めてきた。特に島内法木集落とは、各種の調査活動や、2008年より始まった炭と海産物との物々交換プログラムで経済的な交流も行っている。

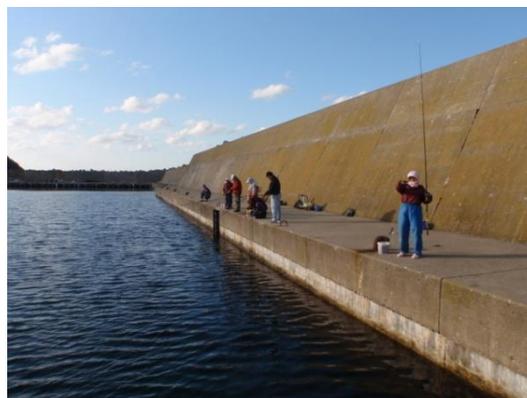
当事業では、これまで行ってきた森の産物と海の産物の交流プログラムをより発展させて、新たなビジネスモデルを作ることを模索するとともに、地域資源を活用したツーリズムを開発にも貢献する調査を行った。また地域調査については、特に2009年4月から長年休校状態であった飛島小学校が開校したことも受け、地元小学校とも連携しながら地域調査を行った。8月、10月の2回にわたって島内のふるさと資源の活用方法について検討を行っている。

戸沢村角川地区と金山町田茂沢地区の炭焼き職人にもそれぞれ同行いただき、炭の供給と飛島の産物提供のモデルを確立するべくワークショップを行った。

合わせて、これまで開発してきた森と海の物産を融合した実験料理の試食会を10月に行った。これらの活動と並行してこれまで調査したデータを電子化し、検定に活用すべくデータベース化する作業を行った。



森と海の産物による実験創作料理の試食会



夕方から集落の女性たちはアジの一本釣りを行う。日常の暮らしの営みが様々なツーリズム提供の素材となりうる。

22年度以降の展開について

22年度以降は、これまで角川地区だけであった炭の供給場所を金山町など複数の地域に広げて展開を図る。また、森海の連携学習プログラムを整備し、大学と協働しながらツアーのパッケージ化を図ることを検討している。その際、地元飛島小学校の子どもたち向けの学習プログラムの整備が合わせて図れるように検討していくことを飛島小学校側とも協議している。